

山口悌治著

新装版

万葉の世界と精神
後篇

日本民族の心の原点

山口悌治著

万葉の世界と精神 後篇

日本民族の心の原点

日本教文社刊

〈著者略歴〉

明治37年、神奈川県に生れ、早稲田大学独文学科中退。昭和10年、生長の家本部に勤務。23年、株式会社日本教文社常務取締役編輯部長。27年から宗教法人生長の家本部理事、51年理事長に就任。この間、財団法人世界聖典普及協合理事を兼務。本部総企画局長・基礎文化研究所長を歴任。昭和53年7月16日昇天。著書に『中のこころ』、『日本をみつめる』（共著）『いのちを詠ふ』（日本教文社刊）がある。

新装版 万葉の世界と精神（後篇）

—日本民族の心の原点—

〈検印省略〉

昭和48年5月15日 初版発行

平成9年8月15日 新装初版

著 者 山 口 悌 治

発行人 中 島 省 治

発行所 株式
会社 日 本 教 文 社

107 東京都港区赤坂9-6-44

電話 03(3401)9111(代表)

©Suzuko Yamaguchi 1973

03(3401)9114(編集)

Printed in Japan

振 替 00140-4-55519

定価はカバーに表示してあります

印刷・製本 光明社

万一落丁・乱丁の際はお取替えします

ISBN4-531-06303-1

大著『万葉の世界と精神』に寄す

画家 林 武

この度山口悌治氏が、三十年を超える長きに亘つて全身全霊をこれ一途に投じて成し遂げた『万葉の世界と精神』は遂に完結を見て、ここに上梓する運びとなつた事は、著者にとりても一般読者にとりても悦ばしき限りである。

この著の前篇には、尊師谷口雅春先生が切々たる推薦の長文を寄せられて『わたしは此の書を、日本人で文字の読める人ならば、日本人全部に是非読んで貰ひたいと切に思ふほどである』と先づ最初のくだりで宣べてをられるのである。

日本は終戦三十年に近づき、日本人本来の勤勉さと誠忠さによつて世界の一大工業国となり、驚異的経済大国となつたが、然し日本人は何となく空虚で、しつかりと日本の土壌の上に足を踏みしめてゐるといふ感じがなく、近頃は肉親相喰むといふ様ないやな事件が日毎に報道されてゐる。正に乱世である。日本は敗戦によつてドイツや朝鮮やヴィエトナムの様に国土と国民が真二つに分断される様な事はなかつたが、国民の思想は分断され、民主とか平和とか進歩とか革新とかの名の下に、左翼思想が根を張つて増上し、新聞雑誌

法律迄もが偏向し、非日本的であり反日本的で国家とか国民とかがどつかへ行つて了つた様である。日本はいはば中心がなくなつて了つた様である。之は人間として耐へられない事であるので近頃しだいに日本人の心情的叫びが方々からきかれる様になつて来た。

現在日本人は日本の本来性を忘れ、或ひは知らな過ぎるといつてもいいと思ふ。明治維新に於ては天皇上御一人を中心に奉り民心は『一』となつて統一され、西洋に植民地化される事はなく却つて西洋文明に追いつけ追ひ越せ、と學んでここ迄来たが本来西洋文明は『二』の思想であつて何事も対立、分析、鬭争、征服の物質主義から生じてゐる文明であつて東洋の『一』なる思想とはもともと矛盾するのである。

『一』なる思想は、例えば樹木が土の中に根を下ろし、枝々の葉末^{はすえ}に至る迄を統合する如くの中心の『一』であり、この中心にバランスされながら枝や葉や花や実が複數に生じて行く。現象の『二』、すなはち互に離れ離れの対立の『二』が西洋思想なのである。根の『一』が土壌の『無限』とつながつてゐる限り樹木は生長し、枝葉や花や実の『二』は榮えて行くが、根幹が無限とのつながりを絶たれると樹木は枯れて了ふのである。

日本に於ける維新とは実にその『一』なる根幹を復古する事であつた。この『一』を確固たるものとする時いつも日本は外国の文明と文化とをわが物として生長し榮えて来たのである。

この著で山口氏の称へる飛鳥維新とはそもそも日本民族がわれわれの郷土を國として形成するその建國の礎^{いしづな}を永久に磐石のものとする為の維新といへるであらう。

詩魂逞しき人山口氏はかねてから万葉の高貴にして壮大幽遠なる響きに感動し、万葉の世界の研究を『生長の家』誌に七十回に亘つて連載し今日それに筆を加へてこの大著は成つた。そのいきさつの心境は、前篇のあとがきにある通りであるが、もともと山口氏は谷口先生の偉大なる御教導によつて大悟して生命の危殆から救はれた人である。かくいふ筆者の私も或る時期に瀕死の重患から『生命の實相』読誦と或る時の谷口師の『無我』なる一喝によつて新生を勝ち得た一人であり、私が山口氏に頼まれてこの著の後篇の序文を書く所以もここにあるのである。

私は山口氏のこの労作を通読して、山口氏が如何に精魂込めて用意周到に、綿密に、精細にあらゆる資料を考証し批評しつゝ、世界に比類なき、万葉と古事記を通して、日本建国の精神の眞実を歌ひ上げたか、ただだゞ頭が下り襟を正す思ひがする。これを読んだ日本人は始めて日本を本当に知り日本人である事の誇りを自覺し、皇統連綿として二千年もつゞいた日本の祖先の偉大な榮光を見直すのでないかと思ふ。これはいゆる皇国史觀や右翼思想とを乗り越えて世界に通ずる「中」の思想であり、眞理である。ついでながら眞理とは西洋の合理とは紙一重で正反對に異なるものである。酸素と水素が化合して水となる事や猫が鼠を喰ひ蛇が蛙をのむのが動物学といふ、それが西洋の合理であると私はいふ。「中」これは古代日本人が独自に靈感した宇宙觀であり神ながらの道である事を山口氏はその高度な詩魂によつて眞剣に説き明かす。

柿本人麿と稗田の阿礼が同じ役の低い舍人であつて親交があつたといふ事が書かれてあるが、大詩人人麿と大哲人阿礼とは互に有無相通じて啓発しあつた事であらう。聖徳太子はじめ歴代の天皇一丸となつて日本

の建国の礎は天為天工のものとして成就された事であらう。十七条憲法の制定、大化の改新、半島の帰化人は喜んでこれに参じたに違ひない。今飛鳥、奈良に遺る世界に比類なき崇高にしてシンとした永遠感みなぎる仏像や建築は、それらの帰化人の工匠によつて伝授された技術から日本人の承けついだものだ。

伊勢神宮こそ日本のあぜ倉の形から日本独自に創作されたもので、『しんのみ柱』こそ「中」の象徴であるであらう。

天之御中主の神こそ、宇宙の原点であり、そこから一切が結ばれて地上は顕現したのだ。それが『神ながらの道』である。

私は画家となつて或る時期に谷口先生の唯神実相論によつて新生すると同時にかねて臆氣にさぐり求めた『画面の中心』即ち構図法が拍車をかけて憑靈的に進んだ。画面の中心こそ即ち「天の御中」なのである。

画面の或る規定された中心の一点で宇宙の中心とつながるのである。でなければ画家は『無限』をつかめないのである。中心の一点によつて視野の上下、左右、前後のものが均衡の状態に置かれる時作品は完成する。それはヤジロベエが一本足で指先に立つのと同じであるし、竿衡が金やダイヤや毒薬の量を決めるのと同じである。油絵は材料が濃稠な物質的材料であり、自然を「物」として追求するのでその構図は数学的に厳密であらねばならない。私は自然を、一、三、五、七、九、の奇数と、二、四、六、八の相反する奇数と偶数の綾としてそれを或る一点で結ぶ。その一点こそ中心点でありその一点こそは宇宙の零と無限大につながるのである。その一点は天の「中」といふより他ない。そして「モノモノ」は即ち八百万の神なのである。そ

ここに絵画の眞実が生まれる。滅びる現象の「モノ」を永遠化するのが作品である。

ニュートンは万有引力又は重力を発見し、地球の中心に凡ての「モノモノ」が集中してゐる事を人に知らした。アインシュタインはそれをもつと飛躍させたであらう。然しそこから出て来たものは産業革命であり、科学技術であり原水爆だつた。西洋人は何故地球の中心の力を宇宙観として哲学的、神的に驚かなかつたのだらう。東洋人のキリストが西欧に現れなかつたら現在のヨーロッパはどうなつてゐただらうか。もともと『二』から出た唯物論のマルクスレーニン主義は世界を永久に軍国主義に迫ひやるだけであらう。

それはとも角、前篇の序文で谷口先生が感動賞讃してをられた聖徳太子の十七条の憲法制定は、「中」の均衡であつて、先生のいはれる言霊学の「真^{*}均^つり事」であるとして私は前の構図論を享けてつけ加へ、日本建国の眞理国家なる所以を僕流に述べたい。

日本の古事記や万葉はまだ印度や支那の文化と文明を取り入れない先きに、既に全宇宙の天のみなかの哲学を直感してをつたのだと私は切に思ふのである。

日本の「かんながら」の道はまだ世界に本当には知られてゐないし日本人自身も単にいはゆる俗な神道的なもの位にしか思つてゐない様な気がする。

山口氏の大著『万葉の世界と精神』は大師谷口先生の古事記の講述から出発して山口氏の詩人的素質が前篇の序章にあるやうに成務天皇の神域に佇^{ひま}ずんだ時のその啓^{ひら}きに由来するものと思ひ、私はこの著が日本人の心に影響する力は永く偉大だと思ふ。

二十世紀、日本の昭和年代に谷口先生の出現した事は万葉や古事記と共に今後愈々ひろまらねばならない。

特に世界に独特な日本の三十一文字の短詩形、五七五七七の奇数の「中」^{「みなか」}のリズムで結ばれる和歌、歴代天皇と一般民衆の美風を代表するその和歌の原形ともいふべき万葉こそ日本人は現代文学より先きに研めるべきものであらう。私の家系は国学者三代であるが、若く洋画家となつて歌には迂^ういものであるが今これを書きながら、山部赤人の「和歌浦潮みちくればかたをなみ あしべをさしてたづ鳴き渡る」を、潮みちくらし、又能因法師の「都をば霞とともに立ちしかど 秋風ぞ吹く白川の関」を、霞とともに立ちしなりと万葉調に添削して、亡父甕臣が個人雑誌「皇道國語」に発表してゐた事を思ひだした。以上序として私説を述べ過ぎた感が強いが以上の拙文を以て序する次第である。

昭和四十八年四月三日

万葉の世界と精神

——日本民族の心の原点

（後篇）

目次

大著『万葉の世界と精神』に寄す

林 武

五章 相聞の歌に溢るる民族の抒情

1 作者不明の歌について

2 作者不明の相聞の歌

3 作者名のある相聞の歌

六章 東歌及び防人の歌と東国庶民の天真

1 東歌より

2 防人の歌より

附 防人の歌現代篇

七章 万葉後半の代表歌人と生命感覚の衰褪

144 117 91 50 9 3

結

章

あとがき

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| 4 | 3 | 2 | 1 |
| 大伴家持の歌 | 山部赤人の歌 | 山上憶良の歌 | 大伴旅人の歌 |

見返絵
亀尾
克

323 299 238 219 174 155

万葉の世界と精神

——日本民族の心の原点

（後篇）

五章 相聞の歌に溢るる民族の抒情

1 作者不明の歌について

作者不明の歌の作者は誰か

万葉には、作者不明の歌がおよそ二千三百首ほどある。万葉の歌の総数は約四千五百首であるから、その半数以上を作者不明の歌が占めてゐるわけである。その中には「人麿歌集所出」の歌が三百七十首ほどあつて、明かに人麿作と認められる歌がすくなくあるとされてゐるが、それにしても、作者不明の歌が過半を占めてゐるといふことは、「万葉の世界とその精神」の一面を充分代表するにた

る歌の大集団だとしなければならない。

ここで考へられることは、過半の量を占める歌の作者がなぜ不明なのかといふことと、不明な作者の歌がなぜこれほど大量に採録されてゐるのかといふことである。学者の間には、いろいろの角度からの分析があるが、要するに作者「不明」といふのは、それらの歌が、名も無き一般庶民の歌だつたからであらう。たとひ官途についてゐたとしても、その地位身分が低い者の歌だつたからであらう。しかしこのことは、歌の良否優劣とは関係がない。作者名が記載されてゐるからとて、その歌が必ずしも優れてゐるとは限らない。例へば、大伴家持の歌は、四百数十首も収録されて、個人としては集中第一の量を誇つてゐるけれども、その大半は残念ながら凡作であるからである。名も無い庶民の歌であるからといつても、その中には、清純な情感を

素朴にうたつて、珠玉のやうな名品がいくらでもあるからである。たゞ、名の分つてゐる作者の歌の方に、個性的で格調の高い秀歌が多いのは事実である。

だいたい庶民の歌は、嬉しいにつけ悲しいにつけ、その時その折の天真の情感を野花の如くに咲かせた歌なのであつて、人々の口の端にもほらず、そのまゝ消えてしまつた歌の量は、それこそ尠大なものであつたらうと想像される。今日と違つて、まだ仮名文字の影すらなかつた万葉の時代に、「万葉仮名」と呼ばれてゐるやうな複雑な漢字の用法を駆使して、一般庶民が自分の歌を書残すといふことは全く不可能な時代であつた。

その庶民の歌が、記録にとゞめられるにいたつたのは、たゞ／＼その歌の心や風情に、人々の心情の機微に深々と触れるものがあつて共感を呼び、口から口へと民謡のごとく歌ひつがれもてはやされて、作者が誰であらうと関係のない、一般庶民の「共同の歌」となるにいたつて、いつか心ある人の記録にとゞめられたのである。名も無い庶民の歌は、歌ひつがれて一般庶民の「共同の歌」とならなければ、記録されて遺る機会を持ち得なかつたわけである。

人々の共感を呼ばない歌は、消えるほかはなかつた。庶民の歌において大切なことは、その歌の「個人性」ではなくて「共同性」であつた。この点では、著名な歌人の歌とは評価が逆になる。著名な歌人の名をいよ／＼高からしめるものは、その歌の個性的な特色の發揮であつて、共同性は類型化として拒否される。ところが庶民の歌では「共同性」がその歌の良否を決めるのである。したがつて名も無き庶民の歌は、その本質において、彼らの生活の根となつてゐる、——彼らが遠い昔から代々受継いで来た、彼らの社会や集団の共通の生活感情や、意識や精神や伝承と深く結びついてゐる。結びついてゐなければ「共同の歌」とはなり得なかつた。作者不明の庶民の歌が、強く民謡性を宿してゐるのはこのためなのである。民謡は共同性を条件とするから、共同性の要求は、庶民の歌をおのづからに民謡風とする。

以上で、「作者不明の歌」の作者は、誰であるかがはつきりしたと思ふ。「作者不明の歌」の作者は、個々の個人ではなく、共通の生活感情や意識や精神や伝承を生きてゐる、一般庶民の集団だといふことである。一般庶民が代々

受継いで、その中で生活し、その生活の支柱として来た感情や意識や精神や伝承が、庶民の歌、作者不明の歌の作者なのである。言葉を変えていへば、庶民の生活の中に、綿綿と息づいてゐる日本民族の伝統の心情が、作者なのである。だからこそ、個々の特定の作者を不明とするのは正しいのである。

後世の『古今集』や『新古今集』には、全く見ることにできない、「万葉集」の特色の一つは、日本民族の伝統の心情を作者とする名も無き一般庶民の歌が、大集団をなして万葉の過半を占め、著名な作家達の歌群を下から大地のごとくに支へながら、兩者渾然と一つに融合つて、「万葉の世界とその精神」を形成してゐることである。兩者の間には、断絶もなければ違和感もない。一般庶民が、個々の個人としての「個人性」を歌はず、日本民族の「共同性」を歌ひ、その「共同性」を母胎として著名な歌人達の「個性的」な秀歌が花となつて咲き開いてゐるのである。

文化勲章に値する作者不明歌の筆録者

ところで、古代の日本民族の心情を余すところなく歌ひ

あげてゐるのが万葉であり、その万葉の過半を占めて、著名な歌人達の秀歌を、さながらに大地の如く支へてゐるのが名も無き庶民の歌だと書いたが、では、これらの庶民の歌に深く心を寄せてこれを採集し、書残してくれたのは誰であらう。前にも書いたやうに、一般庶民は感情の赴くままにたゞ歌つてゐるだけであつて、自分達の歌を自分で書き記すことはしなかつた。できなかつた。その彼らの歌を丹念に採集して、複雑で不便な万葉仮名をもつて筆録するといふことは、並々ならぬ志と熱意がなければできないことではない。この難渋な大事業を手がけてくれたのは誰であらう。時の政府当局が計画して行つたのではない。さうせずにはゐられない、やみ難い想ひに駆られて、努力を惜まなかつた心ある人々がゐたのだ。それらの人々の無償の努力によつて庶民の歌が残された。

もし、それらの人々がゐなくて、万葉に作者不明の庶民の歌が、一首も収録されてゐなかつたとしたらどうであらう。万葉が与へる印象は一変し、あの新鮮な魅力は半減してしまつたに相違ない。万葉は、一般庶民とはなんの関係もない、特定の階層に属する人々のみの歌集であるにとゞ